

ミャンマー便り 第1号 平成26年5月23日

選舉院の皆さんお元気ですか。5月10日に日本を経ち、早いものでヤンゴンに来て2週間が過ぎました。来た当初は毎日35度の気温でここにいるだけで汗が吹き出し、寝苦しい毎日でしたが、一週間ほど前から雨が降り始めました。雨期が始まるには少し早い気がしますが、これから一週間の週間予報を見ても毎日雨の予報になってしまいます。やはり、ミャンマーでも気候変動が起こっているのだと思います。

さて、私の生活にも変化が現れました。最初の一週間は家を探し、銀行口座を開設してあちこち飛び回るのにタクシーを利用しておりましたが、今は少し余裕が出てきてどこに行くにもバスを利用しています。例えば、レターの印刷や色々な相談でセダナー（以前私が仕事をしていた団体です）の事務所に良くお世話になっていますが、ここに行くのにタクシーだと2,000Kyats（約220円）バスだと十分の一の200Kyatsで行けてしまいます。僅か200円程度のことをみみっちいと感じられるかもしれません、「鹿も横もねば...」で100回乗ったら2万円ほど節約できます。つまり、行ったら帰らなければなりませんので50回行けばということですが、行先はここだけではなく銀行や他の所もありますし、タクシーではなくバスを使えばひと月に1万円程度の節約が可能となります。勿論、行く行くは車を買って仕事をしなければなりませんのでほんの2~3ヶ月のことです。

次にお世話をしている家のことですが、大家さんは敬虔な仏教徒で車の販売の仕事をされています。家賃は一月2,000ドルです。今月は月の途中に来ましたので日割りにして毎日50ドルで泊まさせて頂いておりますが、これはヤンゴンの安いホテルの値段です。6月からは1年で契約をする予定です。この家を借りて一番助かったことは、最初からインターネットがあったことです。インターネットを引くだけでも1,000ドル程度のお金と通信費に色々な書類を出すなど相当な手間暇を要するとのことでした。

今この家にはお手伝いさんとその娘、それから、大家さんが生涯から学校の教育まで全部面倒を見ているシャン州の中学生が住んでいます。お手伝いさんの娘は昨日から2ヶ月程宿泊に修行に出ました。今はこのお手伝いさんと住み込みの中学生が私の食事や洗濯、家の掃除などをしてくれています。来月になると学校が始まりますので、中学生は毎日学校に通います。直ぐに身の回りの世話をしてくれる人がいたことも仕事に専念することが出来、本当に助かっています。

たぶん皆さんも私がどんな生活をしているのか想像もつかないと思いますが、これから毎週一回のベースでその日々のミャンマーの様子をお伝えしたいと考えておりますのでどうぞお楽しみに。

平野喜幸

ミャンマー便り 第2号 平成26年5月31日

ミャンマーに来て3週間、やっと家の契約も終わりいよいよ6月から正式にミャンマープロジェクトがスタートします。銀行口座の開設が、日本財團の送金準備締め切り日に間に合わず急遽アルティックから送金頂くなどなかなか思うように進まないところもありますが、そんな中で仕事をするのが当たり前のことがここミャンマーです。今はイラワジ政府とのMOU締結を待っているところですが、それは終わってからが本格的なプロジェクト始動となります。

本来なら既に日本財團よりプロジェクト資金が届いており、プロジェクトに必要な車を買う手続きとか色々と準備のために仕事が始まるところでしたが、お金がなければ動かないのは当然のことですので、お金がなくてもできる所から始めるしかありません。まずはイラワジ政府の許可を得てこれから学校調査を始めることになると思います。ミャンマーの学校は6月より始まりますので、イラワジ管区の知事と会うのがこれほど遅れたのも好都合でした。もし5月でしたら、再度調査に出席されなければならず、今度知事に会いに行くときには学校も始まっておりますので、その足で学校現場を見に行くことが出来るからです。

ところで、事務所の方は門の前にアルティック・ヤンゴン事務所の看板を掛けました。これで知らない人が訪ねてきてもここがアルティックだと分かります。また、事務所がある通りの名前はPandita Streetと言いますがパンディタとはパーリ語で般若（智慧）通りという意味だそうでとてもいい場所に事務所を構えることが出来たと喜んでおります。

最後にこちらで働く現地スタッフですが、もう既に二人から履歴書が上がって来ています。実際の雇用は8月からを考えていますが、6月中には面接をして決めたいと考えております。

合掌 平野



ミャンマー便り 第3号 平成25年6月9日

ミャンマーに来てちょうど一ヶ月が過ぎました。先週は、イラワジ管区の Chief Minister にお会いし、MOU 及び Project Document の書類を提出してきました。その後、7日までに 13 校の小学校を訪問し調査を行いました。この調査は 1 月に調査に来たとき各郡の教育事務所から頂いたリストに基づき、私たちの協力者であるソーナイン氏とマティラさんが事前にそれぞれの学校でプロジェクトの趣旨を説明しておいてくれましたので、今回は参加意欲のある学校のみを取りました。ですから、既などの学校でも建設に必要な資金の一部を口座に積み立て、私が行くのを心待ちしてくれていました。

6月5日はザルーン町のイラワジ川の東にある大きな島(戸数約1000戸)に行き、およそ2時間牛車に乗りました。牛がぬかるみ入り尻尾を握るたびに泥水が体中に飛び散り私が来ていたシャツは泥だらけのままだら模様になってしまいました。6日はジャウンゴン町の本当に窮屈の村に行きました。車が進行する所から約50分土砂降りの雨の中をバイクの後ろにまたがり途中2度二人乗りできないところは歩いて、やっとの思いで村に着きました。お蔭で買つたばかりの携帯電話は画面に沢山の筋が入り見えにくくなり、電話は掛けられるものの掛ってくる電話の音が聞こえないなど問題が生じてしまいました。勿論、バッグはビニール袋に入れカッパを着ていたのにです。このようなどうでも道路事情が悪いために調査より移動に時間を取られてしまいました。

村の生活は私が10年前にプロジェクトを行っていたシャン州よりも更に困難な状況にありますし、村に行く道路事情も最悪な場所ばかりです。海外のNGOや国際機関はもちろん政府でさえも最後まで手を付けられなかつた場所を私が私たちに用意しておいてくださったようです。このような場所だからこそ、村人の私たちに対する期待は非常に大きく、これから直面するであろう様々な障害を乗り越え、村人の期待に応えられるプロジェクトを行わなければならないと決意を新たにした今回の調査でした。

平野喜幸

ミャンマー便り第4号 平成25年6月9日

今回の調査で一番強く印象に残っているのはジャウンゴンタウンシップのズィングー小学校です。最初この学校に来るまで私はそこに調査に行くことを知りませんでした。時間も遅れており次の学校との約束もあり、私の頭の中では、そのことばかりが気になっていました。そして、この学校はレンガ作りのために見た目にはそんなにひどくなく、生徒も39人と少なく、村人も集まって居ないし、なぜこの学校に選ばれてこられたのか分かりませんでした。だからバイクで連れの者たちが到着し、即ち調査を始めましたが、それでもこの学校は私たちのプロジェクトを通るには少し規模が小さすぎるために私の気持ちは乗って来ませんでした。

学校の先生やあとから来た村人に色々と質問を投げかけ一通り調査を終わり校舎の外に出ると、Daw Mya Mya Win 校長が私の元へ歩み寄り、「私たちは 500 万 K 集めるように頑張ります。何とか 30×60 フィートの学校を作りたい。この学校は建設から 30 年が経過し、曲がって非常に危ない状況にあります。プロジェクトに入れてもらうためにはこれから何をすればいいのか。」と目を真っ赤にしながら私に詰め寄ってきました。たぶん校長先生は私の素朴な態度を見透かし、どうしても自分の思いをぶつけないとこの子供たちは教われないと、江戸時代に貧しい庶民が守り育む覚悟でお蔭様に直訴したように訴えられました。

この校長先生はこれから村が集める学校建設基金に自らも率先して 50,000K お金を入れ、子供たちが新しい校舎で安全に勉強できることを願っておられますと帰り道同行してくれたマティラさんが教えてくれました。

先生の給料から 50,000K を出すことも、この小さい村で 500 万 K を集めることも容易なことではありません。それを厭わずに選れる村ではプロジェクトはほとんど問題なく成功します。それは、そこに住む村人や先生たちの志が高く、村の子供に本当に教育の機会を与えたいという慈悲心があるからです。

平野喜幸

ミャンマー便り第 5 号

平成 25 年 6 月 16 日

先週もヒンダダ、ダヌーピュウ、インガブータウンシップに調査に行ってきました。ミャンマー便り第 3 号で申し上げましたように私たちのプロジェクト先は政府でも最後まで手を付けずに残されているようなところと申し上げましたが、まさに今回もそのような場所ばかり行つてきました。

6 月 12 日夕方 5 時、今日 5 校目の調査に行くためにダヌーピュー町のズィーピュウゴンダウという場所に車を置きました。実は、村のリーダーたちは教育事務所からの連絡に朝 10 時から 7 時間を待ち合わせ場所に待っていてくれたということで、丁寧にお詫びを申し上げ、バイクの後ろに跨りました。約 30 分雨の中を道み道のない所まで来ると、今度は田んぼの中を 45 分ほど歩きました。それからポートで 15 分。最後に学校まで歩いてまた 10 分。ようやくバウコン集中学校に着いた時にはあたりがぬいさに見えるくらいの薄暗さっていました。村人はこの村を訪れた初めての日本人見たさと学校建設の話を聞きにたくさん集まってくれました。

まずは暗くなってしまわぬうちにそそくさと校舎の写真を撮り、校舎の中に入ると何も見えずうそくに 4~5 本明かりを点けてもらいました。この学校には 171 人の生徒がおり、7 年生までが通っています。2 棟ある校舎のうち一方は既に 30 年が経過し傾きかけて危険な状態にありました。私がこのプロジェクトはサンタクロースのプレゼントのように校舎をただ上げるものではなく、地元の人達も志心の負担をして貰わないと参加できないと言うと、村人たちは快く 1000 万 K の提出を約束してくれました。

その後、村人の家で地賄料理と把膳のから揚げをごちそうになり、同じ道を帰路につき、元の場所に帰ってきたときは夜の 9 時を過ぎていました。そこからあと 1 時間でこぼこのがたがた道を道みやつとホテルに到着し、家を出て 18 時間の長い一日が終わりました。



会場

ミャンマー便り第 6 号

平成 25 年 6 月 16 日

先週で 6 タウンシップの調査を終え、概ね今年度建設する学校の目途はついた。後は、各村が自分の必要とする校舎のサイズに合わせ建設資金の四分の一を集められるかに掛っている。現在、12 校を選抜しており、すべての学校で予定通り建設資金が集まれば 12 校とも建設したい。しかしながら、1~2 校は予定通り資金が集められず脱落することも考えられるので、2 校は最終的に 10 校を下回らないようにするための候補校ともいえる。

ところで、今回最後に調査したヒンダダタウンシップで、非常に微笑ましいエピソードがあった。今回同タウンシップで建設できるのは 2 校だけなので、調査の前の晩教育事務所長宅を訪ね、既に貯っている 26 校のリストの内 5 校に絞ってもらった。そして、翌日は生徒の多い学校順に回った。最初の学校は私たちのプロジェクトの実施条件に合意する学校だった。2 校目は生徒数は多いが、既に校舎もあり必要性を感じなかっただけに事情を話し、直ぐに切り上げた。3 校目はレッパンズアナウ小学校で、校長先生は、昇進などには気にも留めず 30 年間同じ学校に奉職し、一心に同村の子供たちの教育のために尼くされた人であった。この校舎は 1957 年に建てられた骨董品級で、壁や梁は至る所で修理が施され少し傾きかけていた。校長先生は来年 5 月には定年退職の予定で、50 年以上経過した校舎を見て替えることが出来たら自分は死んでもいいと常々口にされていたそうだ。

そこに突然朝から電線が張り私たちが訪れたので村は大騒ぎになった。話をしている時の村人は驚きと喜びが入り混じったような表情だった。これまでに 200 万 Kyat の積み立てがあるということで、あと 1000 万 Kyat、今月から毎月 200 万 Kyat の資金の積み立てをお願いした。村人は今が校長先生に長年の恩返しをするときと心に決め資金拠出を約束してくれた。前の晚、25 校の内からこの学校を選んでくれた教育事務所長は U Than Naing 校長とは幼馴染で、後の永年の頑張りに敬意を表したいとの思いやりが入っていた。



(レッパンズアナウ小学校)

ミャンマー便り第 7 号

平成 25 年 6 月 21 日

去る 6 月 19 日、急遽バテインに行くことになった。バテインはイラワジ管区の首都で管区首相がおられるところだ。通常首相に会うためには何週間か前にアポイントメントを取り、何時いつ来なさいという連絡を貰ってから行くのだが、今回はちょっと事情があり他の日本人の面会に同行させてもらった。

私も 6 月 5 日に首相に面会し、MOU と Project Document を提出し、次回来るためのミャンマー側からの招待状をお願いしていた。それらの進捗状況について 17 日に確認の連絡を入れたら全く何も進んでいないということだったので、日本人の面会をアレンジしているソーナイン氏にお願いし私も同席させてもらった。但し、ただ金魚の糞のようについていくばかりでは出席させでもらう相手にも申し訳ないので私が選択することになった。

彼の会談が終わって、最後に 5 分だけ時間をくださいと首相にお願いして実際には 10 分くらい時間を頂き用件を済ませることが出来た。MOU の書類の訂正是必要ないということであったが、締結のサインの日時はまだ言ってもらえなかった。招待状については、政府のレターヘッドで印刷して首相がサインをすれば良いだけの手紙を作ってデータを渡してきた。前回の会談で建設する学校は首相自身が決めると言われていた一番の懸念事項は、先週私たちが首相の地元であるトゥージ町を調査し、その翌日に首相がそこに行かれ現場の先生方から色々な報告を受けておられたこと、私が調査の状況を報告し経済的にも苦しく本当に必要な学校を置んでいるということを理解してもらった上で構ね私が選んだ村の学校を建設するということで了解を得ることが出来た。

同行させて頂いた方の会賀も巧く行き大変喜ばれ、私も大変貴重な機会を受けた一日だった。6 月 19 日は首相の誕生日だったので懇意が良かったことも幸いした。



左がイラワジ管区首相、背中が私

ミャンマー便り第 8 号

平成 25 年 6 月 23 日

ミャンマー語に「セイニッティー」という言葉がある。セイとは心のことで、これにニッティーが付くと「あいやだ」或いは「むしやくしやする」というような意味になる。

私もまだ心が練れていないので、時々そのような場面に出くわす。昨日がそうだった。金曜日は大風が吹き風も強かった。セダナーの事務所で仕事を終え、自宅に帰るとインターネットが繋がらなかった。パソコンで何度修復しても改善されない。おかしいと思い、電話の受話器を取ってみると音がしていなかった。電話線が切られているのである。ミャンマーには電話線が切れた時に修理をするラインマンが居るが、実は彼らが切ったのである。電話線が切れて電話が使えないとなるとラインマンの所へ修理の依頼が届く。彼らは電話の回線を復旧して、3000K(約 316 円)を貰う。つまり彼らのサイドビジネスである。政府から十分な給与を貰っていないのだろうが、利用者としてはそのようなことを直されると頭に来る。実は先月にも 1 回あった。お手伝いさんに聞くと 3 ヶ月に一度くらいと言つたのでまあここはミャンマーだし仕方ないかと思ったが、毎月直されると腹が立つ。1 回切られると修理までに 3 日は掛る。昨日も 2 回電話をしてすぐに直してとお願いしたが、結構は来てくれなかつた。

一ヶ月の電話代は 1800K(約 189 円)、修理代は 3000K、電話代より修理代の方が高い。これがミャンマー流なのであるが、最初から電話代をもっと高くして後ろに必要な料金を貰うようにならないものかと頭をひねってしまう。そうすれば、彼らも何の生産性もない無駄な仕事をする必要なし、市民から嫌われる必要もなくなる。この文章を書きながら彼らを非常に怒る想いになつた。

実はこのような話は幾らでもある。10 年前タウンジーに住んでいた時には、私の自転車が泥棒にあった。警察は誰が泥棒したかを知っているし、お礼めしに何度もあなたの自転車が見つかったと電話てくれた。(この時には私の自転車はどうとう見つからなかつたが)

先日携帯電話を買った時も一週間前に店舗を調べて行った時は 160,000K だが、実際に買った日には 185,000K に値上がりしていた。

大風が吹いた日には電話が危ない。みんな承知のことだがラインマンが風のせいで電話線が切れた言い訳をするためだ。

電話は今日 16 時になってやっと復旧しました。ラインマンさん雨の中お仕事お疲れ様でした。

感想合掌

※ ミャンマーの人が全てこのような人たちはかりだと思わないでください。このような人はほんの数%です。どこの国にもそこの国の習慣や風習成りは文化があり、外国人の価値基準で良いとか悪いとか言えないことがあります。

ミャンマー便り第 9 号

平成 25 年 6 月 26 日

6 月 23 日日曜日、今朝 6 時半頃お手伝いさんは水曜日に帰ってくると言つて田舎に帰った。彼女の田舎は私たちがプロジェクトを行っているイラワジ管区のヒンダダ県にあるレーメンナーチ区である。そして、もう一人、シャン州から来てここで中學に通っていた女の子も転校して田舎に帰つて行つた。中學生の方は 1 週間ほど前から帰る話があつたが、お手伝いさんがそう言つたのは前日のことである。この家の鍵は外からは掛けられないで、私は新しく鍵を買ってチェーンで鍵がかかるようにして合鍵の一つを彼女に渡した。また、久しぶりに帰省するので土産でもと思い 10,000K を持たせた。

ところが同日の 10:00 頃になつて彼女は 2~3 日帰省するのではないか分かつた。シャン州に帰る中學生は送つてもらうために大家さんを待つていて、大家さんが約束の時間に来てくれないので私が電話を掛けて上げた。二人の音を聞いてみるとお手伝いさんは大家さんには一言も言わず、勝手に暇を貰つたようだった。1 時間くらいたつて、大家さんが来て全てが明らかになるが、彼女は荷物を梱めて出て行つてしまつたのだ。

いったいどうしたのか。突然道つて来た日本人のために 3 度のご飯を作つて、掃除洗濯は何の楽しみもないと思うが、これまででも同じような生活をしていたはずである。あと 1 週間で 6 月の給与を貰えるはずであったが、それも渡わずに帰つた言つことは余程帰らなければならぬ理由があったのだと思う。中學生が村に帰るので自分ひとりここに取り残されることを考えることが出来なかつたのだろう。

これまで一生懸命仕事をして貰つて、何の問題もなかつた。私の想像でしかないが、やはりミャンマーの女性は別緒とはいえ同じ敷地内に夫以外の男と二人きりになることを受け入れられなかつたのではないかと思う。だから、シャンの中学生が帰る日に一緒に帰つてしまつたのだと思う。

月曜日の夕方、大家さんから電話があつたお手伝いさんに電話を掛けてみたが、平野さんが言つた通りだと。大家さんは彼女の娘が宿院から帰つて来るまで一緒に泊まつてくれる女性を派遣するということでお手伝いさんは納得して帰つてくるということになり、一晩滞着した。そして、お手伝いさんは 25 日火曜日に帰つてきて、またご飯を作つてくれるようになった。

ミャンマー便り第 10 号

平成 25 年 7 月 4 日

去る 6 月 28 日から 30 日までタウンジーに行つてきた。前回は 1 月の調査の時だから半年ぶりだった。10 年前からすると新しいお店や建物など雰囲気は変わつてしまつたが、6 年間住んでいたところなのでやはり懐かしさが込み上げてきた。

個人的な休暇で行つたが、2 日半ほとんど仕事のようなものだった。ヘーホー空港について途中のレストランで昼食を摂り、タウンジーではまず PNO の事務所でウアウンキン(シニアオフィサー)から学校建設について色々とアドバイスを貰つた。その後、セダナープロジェクトで第 1 校目の落成式をしたガナインユエ小学校を訪問した。ベンキは剥がれ落ちていたが、校舎自体はまだしっかりしていて雨に漏れるベランダ以外は目立つた損傷はなかつた。10 年ぶりに村長とも会つたが、学校建設後は電気、道路、図書館と村の発展のために皆で頑張つているということだった。

翌日は、一週間前に私の居るヤンゴンの家から村に帰つた高校生の家を訪ねた。彼女はまだ学校に通つていなかつたので、高校の寮に無料で入れるように以前から観察していたハムシー高校寮の舍監にお願いした。その後は「地球市民 ACT かながわが」支援を行つてているティハムスエ中学の生徒寮を訪問、11 年前に始めた入植デモファーム・カラモジア村を訪問し意見交換を行つた。村人は「人生で最高の宝くじに当たつた。10 年経つて経営も安定し、家族が幸せで暮らせこれ以上望むものはない。」旨が口を揃えた。

最終日は、朝から地球市民の会のタンボジ研修センターに行き約 20 名の高校生に講演を行つた。まず、私がミャンマーから日本に帰つて行ったれんげ農殖の活動について写真を見ながら語り、その後はどうしてこの研修所を創つたか。皆にどんな人間になつてもらいたいかなどについて語つた。午後はそれぞれの生徒に「私の夢」と題して 5 分程度で発表してもらい、質問や意見を交換し最後に私が総括した。

いつものことであるが、食事はどこに行っても誰かが準備して食べさせてくれるし、3 日間のタクシ一代もニニーコー氏は受け取らなかつた。仏様のお導きと人々の慈悲心に満ちた短い旅は終わつた。



(ティハムスエ寮の中学生)

ミャンマー便り第 12 号

8月 21 日

7月 19 日から 8月 11 日まで家族を連れて来るために一時帰国していましたので、ミャンマー便りが一ヶ月以上空いてしまいました。今日は一時帰国中に起こった珍しい出来事を紹介します。

7月 23 日ビザ取得のために上京しミャンマー大使館にエントリービザを申請しました。私は 90 日のビザを貰うつもりでしたが、窓口で「道信エントリービザは 4 週間のものしか発行していません。どうなるかは、上の人が決めるので分かりません。」とそっけない答えが戻って来ました。まだ、政府との契約も終わっておらず 4 週間のビザでは時間的に滞在許可への切り替えも間に合わないため、誰かに言ってどうにかしなければならないと焦っていました。丁度その隣門の近くの受け付けに並んでいる若者から「平野先生ですか」と声を掛けられました。もう 10 年以上も会っていませんから最初はだれか分かりませんでしたが、私が以前シャン州で日本語を教えたググ(通称)でした。彼は平野田大学法學部を卒業後現在は上級弁護士として日本の弁護士事務所に勤務し、大使館にも出入りしているミャンマーの青年です。

早速彼に事情を話すと直ぐに受け付けに聞いてくれ大使の秘書に繋いでくれました。大使の秘書からは、今日中にミャンマーのイラワジ政府に電話し、そこから外務省に FAX で私たちのパスポート番号を送って貰えば間に合うと言われました。私は直ぐにコーディネーターのソーナインに電話し、そのことをお願いしました。しかしながら、思うようには道まずメールのやり取りなどをしながら翌日の夕方まで掛ってしまいました。ですから、たぶん間に合っていないだろうと思いつれども、25 日にパスポートを受け取りに行く時は直接窓口には行かず、一昨日ググが取り次いでくれた受付に行き再度大使の秘書に繋いでもらいました。そして、その後の状況を説明し一等書記官に相談して貰い最終的には漸くに 90 日のエントリービザを貰うことが出来ました。

ミャンマーで活動していた時も私が過っているというより、誰かが道を作ってくれてその上を歩いているような感じでしたが、今回も仏様のお導きで 10 年ぶりにミャンマー大使館でググに会えるように取り計らって頂いたよう思います。

合掌 平野喜幸

ミャンマー便り第 13 号「建設校の決定について」

8月 31 日

8月 27 日から 30 日まで今年度建設する学校の最終決定のためにモニタリングを行いました。7月には建設を予定していた幾つかの学校が村の自己負分の資金(建設費の四分の一)を集められずに脱落していったために急遽追加で調査を行い新たに 3 校加えたことと、前回脱落した学校が再び脱落した恩を吹き返したりしたために、最終的に 5 つのタウンシップで 12 校が可能性のある学校として残りました。(今回のモニタリングでも 2 校が脱落)そのうち今年度建設する学校は 10 校ですので、2 校を落とすことに対して非常に心が痛みます。

一度脱落して復活した学校は、以前にもこの「ミャンマー便り」で紹介したジャウンゴンタウンシップのズインギー小学校です。校長先生自らが学校建設のために 50 万チャットを寄付してくれた学校です。7 月に行った時には村はもうこれ以上お金を集められないといふ人たちは福音を吐いていました。私たちは朝一杯村人を勇気づけお金を探す方法を提案したりしました。校長先生のあきらめない気持ちと村の女性たちが团结し、8月末までに集めなければならなかった 300 万チャットに到達しました。

私は行く先々の学校でどのような方法でお金を集めたかや一番多く出した方の金額などについて聞きました。なぜかと言いますと、そのお金を集める過程の中で村人の頑張り具合や团结度が分かるからです。ヒンダダタウンシップのレッパンズアナウ小学校では、年収 200 万チャットしかない学校の用務員さんがその四分の一の 50 万チャットを寄付してくれた話を聞き、その志の高さに感動しました。日頃から学校で働き子供たちや先生方に接しその必要性を一番理解してくれていたこと、また、これまで学校の仕事で自分が生活させて貢ったという恩返しの気持ちからだと思います。まだまだミャンマーの田舎にはこのような仏様の教えを守り毎日の生活の中で実践している人たちがたくさんおられます。

今回のモニタリングで建設する学校も決まりました。いよいよ 9 月に入り建設の準備を進める時期に入りました。これからイラワジ政府へ建設許可願いの手紙を提出し、それぞれの村で建設する会社を決め各学校の建設委員会と ARTIC の三者で協議を進めて行きます。

合掌 平野喜幸



ミャンマー便り第 14 号「セイダーナーマバープ」

9月7日(土)

セイダーナーとは慈悲心、マーバープというのは「入ってない」という意味で、「セイダーナーマバープ」人を助ける、或いは人のために尽くすという気持ちがない。という意味になります。元々教説な仏教徒の多いミャンマーですので、ミャンマーに来て 4 ヶ月色々な場面で人々の慈悲深い施しや助けを頂いています。ところが最近、それとは対照のことによく出くわしました。

運転手を雇う必要がありますので、直接に来てもらいました。お互いに条件などを確認し合い、明後日月曜日から来るという約束を頂きました。ところが、その日の夕方、ネビドーに行かなければならぬので 3~4 日来られません。帰ったらまた連絡します。という一方的な電話でその後連絡もなく契約を破棄されました。

ザルーン事務所の家の契約をした時には、9月から家を借りるということで 8 月終わりに 3 ヶ月分の前金を支払いました。前金を払う理由は、掃除をしたり、ベンキを塗つたりしなければならないのでということでした。安全性も考慮し家の周りに有刺鉄線を張ることもお願いし、快く引き受けってくれました。ところが 9 月 4 日に行った時は、掃除もろくに終わっておらず、他のことは何も手が付けられていませんでした。また、家を見た時には水道の栓が閉まっていますので分かりませんでしたが、あちらこちらで水漏れがあり、修理もしてありません。極めつけは家に有った備品の電話やベッドなど、使えないような劣悪なものに取り換えられていました。この大家さんは、「誰も住まなくても家の修理はしなければならぬので住んでくれることは有趣いし、それくらいのことは直ります。」と言われていました。しかし、実際はお金を貰えば人が変わったように電話は安いので壊れていれば自分で買ってくれという始末です。

昨年から民主化が加速し、日本をはじめ韓国、中国などたくさんの国から競うようにビジネスマンたちが遙ってきており、私がかつて住んでいた 10 年間とは全く違います。日本でもミャンマーでも人のことを良く考えて行動する人と自分のことだけ考えず行動する人がいます。ミャンマーの人々が仏教の文化に根差した慈悲深い心を失わないようにこの国が発展していくことを願っています。

平野喜幸



ミャンマー便り第 15 号「ミャンマーのオーケストラ」

9月12日(木)

当会会長の川原住職より 9 月 7 日から 18 日までチエロ奏者で指揮者の山本祐ノ介氏がヤンゴンに来られるという連絡があり、アテンドして色々とお手伝いして下さいとお願いされました。

昨日は朝から同氏が宿泊されているパークロイヤルホテルに行き、迎えに来た MRTV(ミャンマー国営放送)の車でオーケストラの団員が待つ同社に向かいました。ミャンマーではここに一つだけオーケストラがあり、山本さんはその指導に来られました。5 月に一回下見に来られており、今回は山本さんが編曲された曲をみんなで練習し 17 日にビデオ収録があるそうです。また、練習されているものの中にはアセアン・ポップメドレーという曲もあり、ミャンマーで開催される来年のアセアンサミットの際に各国の歓迎のために演奏されるそうです。午前中はその練習を見学させてもらい、午後はピアニストの小山京子さん(奥様)も一緒にされヤンゴン日本人学校で 5 年生~中学 3 年生の生徒たちに音楽のお話や演奏を披露されました。

その後 ARTIC ヤンゴン事務所に来て貴い色々とお話を伺いましたが、お父さんである山本直純氏は中井貴一が主演した「ビルマの豊饒」の映画の音楽監督をされたそうで、そのご縁でビルマに来られたのではないかと感じました。ミャンマーでは楽器も不足し奏者の育成もまだまだだということで、今後ミャンマーのオーケストラクラシック音楽の向上発展に貢献したいと仰っていました。



(オーケストラの練習風景:正面中央が山本氏)



ミャンマー便り 16 号「ザルーン事務所開設」

9月19日

9月よりプロジェクト現場のあるザルーンタウンシップに事務所を開設しました。今年度私たちが建設する学校は、ダヌーピュー、ザルーン、ヒンダダ、インガータウンシップなどですが、ザルーンまではヤンゴンより車で4時間そして建設する地域の真ん中よりややヤンゴンよりの所にあります。また、ザルーンにはマンダレーのマハムニパゴダと同じ形の非常に有名な仏像がありますので、全国各処から巡礼客が絶えない所でもあります。

ここに事務所を開設した大きな理由は物価が安いということです。一度隣のヒンダダでホテルに泊まろうとしたことがあります。ところが、ザルーンなら 4,000 チャット(約 400 円)で泊まれるのにヒンダダでは 20,000 チャットと言われ泊まらなかったことがありました。ヒンダダは町が大きく時々外国人が来て泊まるからです。

ヤンゴン事務所を開設した時には一月の家賃は 2,000 ドルでしたが、イラワジ管区の田舎では僅か 150 ドルです。例えば仏院に備える菊の花もヤンゴンだと一束 500 チャットですが、ザルーンなら 200 チャットで済みます。サムツアという三角形の掛け物も半額です。ですから生活費はヤンゴンの約半分で済みます。

9月の第 1 週には寝具や食器、冷蔵庫、扇風機など生活するのに必要なものを揃え、大掃除をしました。しかし何年も空き家だったためまだ生活するには掃除が不十分でしたので、今週インターネットの設置と掃除のために行き、事務机と電話も用意しやっと事務所として使えるようになりました。10 月からは殆ど毎週こちらに来て現場回りをしなければならなくなりますので、これからメイドさんも探す必要があります。

ザルーン事務所の住所と電話番号は以下の通りです。No.812 Adar Street, Naung Pin Zay Quarter, Zalun Tel:044-5555



ミャンマー便り 18 号「生きている仏教」

9月28日

ザルーン事務所のすぐ近くに有名なパゴダがある話は以前も書きましたが、ザルーンに泊まった時には必ず早朝にお参りに行きます。9月 24 日 4 時過ぎに起き、ヨガを済ませ運転手のアウンキンと一緒に外に出ると若い女性の二人組と小学 4 年生くらいの男の子の二人組が家の前をパゴダの方に歩いていました。男の子にどこに行くのかと聞きますと「パゴダに行きます」と答えました。パゴダの参道の前まで来ますと既に多くの人が参拝に訪れていました。

4 時 50 分大きな仏像の前でお参りを始めますと仏壇の中からお坊さんが窓に中に入つて来るよう言われました。ガラス張りの仏壇の中に入ると仏様の座ぐ側でもう一人の世俗人の方と一緒にお坊さんの手伝いをして、仏像の顔を濡れたタオルで拭き、ご飯やお水、お花をお供えし、金の团扇で風を送り、最後に仏像に金塔を貼らせて頂きました。

このパゴダでは毎朝 4 時になると数名の女性達が経を唱え、その声が町中にスピーカーで流れます。人々はそのままに堪かれるように真っ暗なうちから三三五五人々が仏像の前に集まり、歌舞を囁く人、瞑想をする人、花やお水を備えお参りをして帰っていく人など様々です。

仏像のお仕話をするお坊さんや世俗人はまるで仏様が生きているかのように語っていますし、お参りをする人々の心の中にも 2500 年前のお駕御様が今も生き続けています。お参りを済ませるとパゴダの前のお店でコーヒーを飲むのが日課になっていますが、光り輝く金色のパゴダを眺めながら「ミャンマーでは今も仏教が生きている」そのように感じた一日の始まりでした。

ミヤンマー便り第 19 号「9月第 4 週」

9月 28 日

23 日(月)

イラワジ管区首相にプロジェクトの進捗状況を報告し、村人が建設費の 4 分の一を集めたことを非常に喜んで頂き、首相の胸に有ったイラワジ管区の地図をデザインしたバッジを外し自ら私のブレーザーの襟に付けて頂いた。首相は嬉しい村人がお金を集められるとはおられなかつたので非常に喜んで頂き 3 つの建設会社を指定し建設許可を買うことが出来た。

24 日(火)

早朝ザルーンバゴダにお参りに行き、お坊さんから仏像の頭のお勧めに参加させて顶く機会を得た。(このお勧めは皆の尊敬を集め長年お寺のお世話をした人だけがやれることで極めて稀なことだそうです) 管区首相同様、仏様からもご褒美を頂きました。

夜はインカウ小学校に泊まり、学校建設後に行う報酬発電事業の計画書を見せて頂いた。

25 日(水)

レーメンタウンシップに行き、来年度事業のための第一回目の調査を行った。教育事務所は私たちのプロジェクトの趣旨をよく理解頂いており、高校がない川に挟まれた島の中学校に高校までの教育を望むインゼイ村の村人と懇談の機会を得た。村人からは非常に歓迎して頂きこれから毎月建設資金を積み立て、是非来年プロジェクトに参加したいとの申し出があった。

26 日(木)

インガブータウンシップのシュエビーズー小学校でイラワジ管区での第一回目の土着廻肥作りの講習会と実習を行った。村人たちの同心は高く、来月 26 日に大便の切り替えしを行うことになった。当初 90 フィートの建設を予定していたレッソンズアテウ小学校がもっとお金を集めて 120 フィートの校舎を建ることを決めた。

27 日(金)

ダヌービュータウンシップで 8 月の末には陥落しそうになったパウケン中学校が復旧し、建設後は移動発電、飲料水確保、運搬車の 3 つのプロジェクトを実行することを決めた。校舎も土地が少ないので 60 フィートの 2 階建てを建ることになった。

この一週間話が通らない村、先に進まない村なども有ったりしたが、毎日嬉しいことが沢山あり非常に充実した有意義な一週間であった。お陰様で係事に今年度建設する 10 校の学校を決定することが出来た。

ミヤンマー便り第 20 号「ミヤンマーの新車」

10 月 12 日

昨年からの民主化の影響で、ヤンゴン市内には車が溢れ至る所で渋滞が発生している。ヤンゴンで見かける車は 20~30 年前のものはもちろん、バスなどは 40~50 年前のものが今でも現役で活躍している。

概ね日本では新車から 10 年が経過すれば車両価格は殆どない、ミヤンマーではそのような二足三文の車をどんどん輸入し、街の至る所に中古車を売る店がある。ミヤンマーでは日本で 10 年が経過した中古車を新車と呼ぶ。そして、10 年が経過した車でも日本の新車並みの価格で売られている。驚くことは、人々の給料は日本の 10 分の一以下でもそのような高価な車がどんどん売れていることである。

私の事務所にもミヤンマーの新車が 2 台ある。現場用はトヨタハイラックスサーフ 2001 年製約 320 万円(現地購入価格)。ヤンゴン事務所用はトヨタイプサム 2002 年製約 240 万円。私もミヤンマーに来る前イプサムと同じタイプの 7 人乗りワゴン日産リバティーに 9 年間乗っていたのでその車を持ってくることも考えたが、タグの車を持って来ても船代、輸入関税、環境税等で 200 万円近く掛かると言われて諦めた。

最近の渋滞緩和のためにヤンゴン市内では 3 ヶ所で立体交差の架橋が掛けられているが、電車網、地下鉄網のないミヤンマーでこれ以上車が増えれば渋滞の解消はどんどん遠くなるに違いない。

平野喜幸

ミャンマー便り第 31 号「次年度の学校調査を開始」

12月 13 日

今年度から始まったイラワジ管区での学校建設プロジェクトも建設会社との契約を終え建設がスタートし一区切りついたということで、先週から来年度に向けての予備調査を開始しました。

まず、その最大の理由は、私たちの学校建設では建設に掛かる予算の四分の一を村に負担してもらいまして、契約時に第 1 回目として村のお金を支払うことを義務づけているので、6 月から調査を始めればお金を集める期間が 5 ヶ月しかなく、村に参加したい気持ちがあっても参加できないということが生じるからです。実際、今年度建設をする 10 校を決めたもののプロジェクトの本来の目的である村落開発の視点では社にも参加して欲しい学校がありました。

ですから、今から調査を始めれば村がお金を集める期間が 10 ヶ月間あり、参加する村にとっても負担が減り、私たちの方からも学校建設が第一目的でなく、本当に村落開発の視点からプロジェクトに合う学校を選ぶことが出来るというメリットがあります。そうすると、プロジェクトの質が向上し本来私たちが目指した学校建設後に行う村落開発プロジェクトがより明確になり他の地域も真似をしたくなるようなモデル村を一つでも多く作ることが出来るようになると想っています。

今年 6 月にプロジェクトが始まってから 1 ヶ月が経ち、最初の頃はプロジェクトを立ち上げるのが精いっぱいでそこまで見えていませんでしたが、進んでくるにつれて段々とそのような問題点も見えてくるようになりました。従いまして、ここを改善していくば来年度は今年よりももっと質の高いプロジェクトになっていくと思います。

合掌 平野喜幸

ミャンマー便り第 32 号「レーメッナータウンシップ学校調査」

12月 13 日

先週から来年度の予備調査を開始しました。その理由は前回 31 号で述べたとおりですが、来年度はプロジェクト地域を大幅に変えようと考えています。まずは、私たちのプロジェクトをミャンマーに委託したティンセイン大統領の地元であるガブードー T/a. その他はイラワジ管区で最も美しいとされる 3 つのタウンシップを選んで州都バテイン近くのガンジーダウ T/a. ターパウン T/b. 最後は今年度のプロジェクトエリアのビンダダ県にあるレーメッナータウンシップです。レーメッナータウンシップは近くにあるため、建設のモニタリングの合間に見に行くことが出来ました。

先週と今週で私たちのプロジェクトに合う 2 つの候補が見つかりました。一つは 7 年生まで勉強できる Post Primary イエービュースクールです。既に 2 つの校舎があり、100×30 フィートの校舎は昨年 6 月に屋根まで作り整がない状態でした。私たちのプロジェクトに参加するためには途中まで建設した校舎を完成するのではなく、全く新しく作らなければならないと説明すると、この学校を高校(10 年生)まで勉強できる学校にしたいと校長先生や村人は応じてくれました。私たちと一緒にプロジェクトをするためには建設費の 4 分の 1 の 15,000,000 チヤットと、現在途中まで建設した学校を終わるには 15,000,000 チヤットの合計 30,000,000 チヤットが必要になりますが、イエービュースクールではこれから 10 ヶ月掛けて毎月捐金していくと決めました。しかしながら、高校となりますとこの村だけではできませんので周りの 5 つの村と会議を開き最終的に出来るかどうか見守っていきたいと思います。



[学校に集まっているイエービュースクールの生徒たち]

ミャンマー便り第 33 号「イラワジ管区は広かった」

12月 20 日

去る 16 日から昨日まで来年度のための調査でガブードーとガンジーダウの 2 つのタウンシップ附れました。元々このプロジェクトはティンセイン大統領がイラワジ管区に引っ張ってきたものですから来年こそは行かなければならぬという想いで、調査に出掛けてきました。

州都バテインから車で 1 時間ガブードー町に着き教育事務所長と話をしているとこれから行くアウンバ学校はボートで 2 時間半、2 番目のトージー学校はさらに 1 時間半船に乗らなければならぬということが分かりました。ボートに乗リイラワジ川に渡り出しました。水の色は濁った茶褐色ですが、そこは川というよりも海の上を進んでいる感じで、大きな波が一駆船の中へ入り道底のビューさんのズボンはひしょ濡れになってしまいました。また、海からはまだ 50 km 以上離れているというのに、トージー学校で朝している 1 時間の間に川の水が退いてしまいました。帰りは船底が付いて船を押さなければならなくなりました。3 番目のチエインジャウン学校に着いた時は既に 5 時を回り、村を出る時には東の空に霞々と満月が輝いていました。朝 6 時 45 分にバテインのホテルを出て帰ってきたのは夜の 10 時過ぎていました。



[海のように広いイラワジ川]

ミャンマー便り第 34 号「日本では聞かれない 2 つの話」

12月 20 日

① 昨日イラワジからヤンゴンに帰る途中、学校帰りの先生を車に乗せました。ミャンマーでは多くの先生がヒツチハイクで通勤しています。昨日の先生は 6 ヶ月になる赤ちゃんを抱いていました。話を聞くとミャンマーの産休は産前産後 45 日しか無く、45 日目からは赤ちゃんを連れて学校に通うそうです。私達の車に乗ると先生は直ぐにおっぱいを飲ませ始めました。赤ちゃんもおっぱいを飲みながら安心して眠りました。30 分くらいでヤンゴンのはずれのランタヤーという場所で降りられましたが、彼女が通う学校は車を乗った地点からまた船で 1 時間かかる場所にあるそうで、この赤ちゃんの健康と幸せを祈らずにはいられませんでした。

② 12 月 18 日、来年度の学校調査のためにガンジーダウ・タウンシップのジージャウン準中学校を訪れました。1 年生から 7 年生まで 370 人の生徒が通う学校です。8 年生になるとボートで 1 時間離れた学校の寮に入つて勉強しなければなりませんが、15 人の 7 年生に 8 年生に進学しますかと聞きましたら、一人だけ進学できない生徒がありました。理由を聞きますと両親は離婚し父と離れ、母親は 4 年前に病氣で亡くなり現在は妹と二人暮らしで、一月 40,000 ミャットの寮費が払えないということでした。また、将来何になりたいかと尋ねますと医者になりたいと言いました。母が病氣で痛みに耐えながら亡くなっていく姿を見て医者になって病人を救いたいという気持ちになったということです。しかし、医者になるためには大学まで行って勉強しなければならないことを彼自身も知っていました。

先生に彼の成績を聞いてみると 16 人中 13 番目だということで、成績も良くはありません。どうせ進学できない跡めの気持ちで勉強にも身が入らなかったのかもしれませんので、私は 1 回だけチャンスを上げることにしました。彼が 8 年生で通う学校はミンガゼイ高校と言いますが、丁度その校長先生が私たちの調査に同行してくれていました。その高校の 8 年生は毎年 100 名以上の生徒がいますが、来年 30 番以内になつたら 10 年生の高校卒業まで支援するから頑張るように伝えました。

彼は初めて目にする外国人に恐れをなし殆ど何も言えませんでしたが、気持ちだけは伝わったようでした。たぶんこの学校は来年のプロジェクトに入って来ると思いますので、しばらく見守っていきたいと思います。

ミャンマー便り第 44 号「切り株」

平野喜幸

下の写真はダスピュータウンシップザチエ小学校にあるコッコーという木の切り株です。

昨年 7 月、日本から村の人が建設費の 4 分の一のお金を負担することが出来るなら、学校建設に協力したいという話が舞い込んできました。村の人は校舎も古く危ないし遅りたい気持ちはありましたがあ、10,000,000 チャットという大金を集められるか心配でした。しかし、村で話し合いを持ち、今過らねば今後も白力の学校建設は無理。例え政府の権力で学校が建ったとしても十分な大きさにはならない。しかも、今回の話は、自分たちが集めたそのお金は村の村落開発基金として学校建設後に戻ってくる。こんなおいしい話はないと、村人は清水の舞台から飛び降りる覚悟でこの大金を集める決断をしました。

学校建設も半ばになって、新しい学校に入れる「机とイス」を準備しなければならない時期になり、村人は学校の敷地の中にある大きな 2 本の木を切ることを決めました。これまで 10,000,000 チャットを集めるために生活を切り詰め無理をしていましたから、これ以上のお金をまた村で集めるのも大変です。ですから、村はこの木をわいて机の天板として使い、必要な机の足の部分のみを購入し、村の大工が机を作ります。

子供達にとっては最高のプレゼントです。お父さんお母さんも学んだ学校の 50 年以上も村の子供たちを見守り続けてきた大木が、今度は机に生まれ代わり村人達と日本人が一緒に作った新しい学校の机の上で勉強できます。



ミャンマー便り第 45 号「イラワジ管区の命脈」

平野喜幸

ミャンマーには連邦政府の下に 7 つの州と 7 つの管区、全部で 14 の地方政府があります。現在、私が学校建設を進めるイラワジ管区はその中で 2 番目に美しい地域だと言われています。イラワジ管区はイラワジ川がもたら

らす肥沃なデルタ地帯であるため米の生産が盛だと思われがちですが、実はそうではありません。確かに毎年雨期に浸水する地域の田畠は肥沃で豊かな実りを齎しますが、雨季には管区全体で陸地の三分の二が水に沈み、深い所は 2m も水没してしまいます。勿論そういう所では、年一作しか作物が採れませんし、雨季の間は魚を捕ることくらいしか仕事がありません。また、10 年に一度くらいは大洪水に見舞われ米の収穫が出来ない年もあります。

さて、下の写真は前号でお伝えしたコッコー木の写真です。このような厳しい環境条件にあるイラワジ地域で人々の生活を支えているのがこのコッコー木です。イラワジ管区のどのタウンシップに行ってもよく見かける木で、乾季になると写真のように枝が切り落とされ薪として煮炊きに使われます。這芽力が強く村の人々は輪番で何年に一回枝を切り落とします。10 年前に私が住んでいたシャン州ではクラップアップルの木をこのように薪として使っていました。この木の特徴としては、水に浸水しても枯れないということがイラワジ地域に適応してきた第一の理由ではないかと思われます。コッコー木はまさにイラワジ管区の人たちの命脈と言わねばなりません。



枝が切られたコッコー木と切られていないコッコー木

ミャンマー便り第 97 号「大歓迎のアナウズインピューゴン村」

2015 年 1 月 20 日

去る 1 月 18 日、日本財団の長谷川さんと共に学校建設中のアナウズインピューゴンを訪れました。当初は今年の建設の候補となっていましたが、戸数や生徒数も少なく、4 分の一のお金を集める時にも苦労していましたので最終的に落ちてしましました。しかし、村は貧しいながらも頑張って 7,000,000 Kyats のお金と 3,000,000 Kyats 分の資材を集めていますので、何とか協力できない者かとドナーを探しました。すると日本財団の紹介で山口県の社会福祉団体の優喜会様から 100 万円の寄付が寄せられました。

村では自分たちで集めたお金と資材で 12 月の中旬から建設を開始し、この度長谷川さんの訪問に合わせて優喜会様からの寄付金の贈呈を行いました。

村の入り口から踊りや太鼓、日本とミャンマーの小さな国旗の旗を振った村人たちが両側で盛大に迎えてくれました。建設中の校舎は基礎が終わり、鉄筋の柱を立てているところでした。また、僧院での贈呈式が済むと多くの農民たちが集まり、土着薙刈りの実演会を行いました。

3 月には落成式が行われますので、優喜会様からの出席もあってもっと盛大なお祭りになると思います。



門柱まで建てての大歓迎

優喜会の代わりに寄付金を贈呈する長谷川さん



カレン族の踊り

60×36 フィートの建設中校舎

ミャンマー便り第 102 号「ターバウン教育奨学金」

3 月 1 日

昨年 6 月ダヌビュータウンシップで自立型循環奨学金制度を開始しました。ダヌビュー地域の教職員全員が毎月 500Kyats を寄付して頂くことによって奨学基金を創設し長く奨学金制度として持続させていくことが出来ます。ダヌビューの場合は、毎月 20 名の高校生に 2 年間提供していますが、受給している生徒は父親が居なかったり、家族が病気がちで働けなかったりと経済的に貧しく成績は優秀な子どもたちばかりです。

今年も 6 月の新年度からターバウンタウンシップで同様の奨学金を開設すべく去る 2 月 26 日にターバウン教育事務所で地区毎の責任者の先生方を集めて頂き説明会を行いました。集まっている先生方からは積極的な意見や質問がなされ参加者全員の賛同を得ました。これからタウンシップ内の全ての先生に同意を貰い奨学基金制度が創設されます。私は初年度に奨学金を提供する 20 名に 2 年間だけ提供し、翌年度からの受学生には先生方の寄付で集めたお金が使われます。2 年間でおよそ 12,000,000K 以上の基金を準備することが可能になり独立立ちすることが出来ます。また、受給した生徒も将来仕事をはじめたら自分が貰った恩を次世代の同じ境遇の子供たちに返せるように返還型になっています。

このように書くと非常に簡単に簡単に感じられるかもしれません、他のタウンシップでも提案してみましたが、1500 名以上の先生の賛同を得るというのは至難の業で、教育事務所長のリーダーシップに負うところ大です。



ミャンマー便り第117号「ARTIC35周年記念日本招聘事業の実施」

2015年9月11日

去る9月3日から9日まで一週間イラワジ管区の高校生7名と引率の先生二人を連れて、熊本に船便しました。4日朝8時に福岡空港到着後、蓮華院誕生寺に直行しました。ご住職から日本の歴史についての話を聞いた後、午後からは九州産業福祉大学の口腔衛生学科の学生さんたちと交流しました。浴衣を着た学生さんの山鹿灯籠音頭で歓迎をして貰った後には一人ずつ歯科治療実習用の椅子に座り口を開けて虫歯のチェックをして貰いました。その後日本の大学生とミャンマーの高校生に同時に FIFY という意識調査を行って貰い、ミャンマー人は社会や世界に向かた視野が狭い所があるものの郷土愛や愛国心は日本人に比べてはるかに大きいことが分かりました。

一方、日本人は無くなったら困るものという観点で、自分のことばかりに目が行き過ぎて、あまり他の人の気持ちを考えない傾向も伺いました。

翌5日は、それぞれのホストファミリーに連れられ、日本の家庭に入り生活体験を行い、6日は35周年記念事業で熊本市のホールに集まり、私からプロジェクトの報告と学生達からは村での生活のプレゼンテーションと民族舞踊が紹介されました。この日は来年度事業で行う予定のインカブータウンシップの奨学金のために生徒たちは募金箱を持って募金を呼びかけました。7日は玉名市内にある女子高、玉名高校を訪れ、私の講演と学生たちの交説を行いました。終了後は家族温泉に行き、高校生達は時間ぎりぎりまで温泉を楽しんでいました。

終わってしまえばあっという間の一週間でしたが、学生たちの心には志の種が蒼かれた日本研修だったことを祈ります。



歯科検診を受ける生徒



奥の院でのお参り



奨学金の募金を呼びかける



玉名高校で生徒会役員と記念撮影

ミャンマー便り第118号「認定NPO法人取得と外務大臣表彰」

平成27年9月11日

前回の第117号でご紹介しましたようにれんげ国際ボランティア会は1980年に設立され、今年で35年を迎えます。丁度その35周年の節目に当たり、先月は2つの慶事が重なりました。まずは、8月7日付けで全国に50,000以上あるNPO法人の中で、熊本県知事より認定NPO法人として認められました。数あるNPOの中で「認定」を貰っている団体は16%ほどしかありませんので、その社会的信用度はこれまでより格段に上がったと言っても過言ではありません。

次に8月27日、平成27年度の外務大臣表彰を岸田外務大臣より頂きました。表彰状の冒頭には「貴団体は日本とミャンマーの相互理解の促進に尽力され…」とありますので、現在行っていますミャンマーでの学校建設プロジェクトの評価が大きかったのは想像に難くありませんが、この受賞は35年前のカンボジアのインドシナ難民支援に始まり、タイバンコクでのスラム地域、インドのチベット亡命政府及びチベット人居住地、スリランカの津波被災地支援など長年のアジアの同胞に対するARTIC支援者の皆様方の汗と努力の賜物に他なりません。

去る9月6日に行われました35周年記念の受賞パーティには現在ミャンマーの学校建設プロジェクトを支援して頂いております日本財团の国際担当常務森祐次氏にもお忙しい中に東京から駆けつけて頂きました。

今回の受賞を機にこれからも40周年、50周年に向けて益々頑張って行きたいと思いを新たにし、歴史の重みと継続の重要性を再認識する一日となりました。



ミャンマー便り第120号「第1回 ARTIC 開発セミナーを開催」

2015年9月29日

去る9月27日～28日に掛けてこれまで私たちが建設した26校の学校と村から2名ずつの代表が集まりターパウンタウンシップのオーシ高校で「第1回 ARTIC 開発セミナー」を開催しました。この集まりは昨年より実施したいと考えていましたが、場所や人、時期の問題などで中々実現出来ず今日まで延び延びになっていた懸念事項もありました。



(船でオーシ村に向かう参加者たち)

この艇は私たちが行っている Milestone Movement in Myanmar プロジェクトにおいても非常に意義のある重要な大会であると位置づけております。これまで建設してきた一校一校はそれぞれが里程碑であります。その26村の点がこの大会では線として結ばれました。



現在のオーシ高校は1%の水の中

た。そしてこれから、イラワジ管区という舞台において面となって開発運動を展開していく基礎が出来たからです。



(真剣に発表を聞く参加者たち)

セミナーではまず 2013 年度、2014 年度に建設した学校それぞれから 2 校ずつが代表でパワーポイントを使いながら先進事例のプレゼンテーションを行いました。その後、全村から 5 分ずつこれまで行ってきたプロジェクトについての報告がありました。夕食後は、農業、診療所、図書館、発電、心の教育、寮の 6 つの分科会に分かれて討議し、これから自分たちの村で計画していることや自身が興味のあるところに行って学び合いました。



後の分科会（農業）

翌日は、朝 6 時から 30 分間のヨガのセッションでスタートしました。朝食後のプログラムでは、ARTIC35 周年記念事業で日本に行った生徒 4 名とヤンゴン事務所職員の Tun Shew が日本へ行った感想や経験についてセミナー参加者に話をしました。その後、U Thant の質問形式のゲームで頭の体操を行い、最後にイエーピュー学校の校長先生から、U Thant 作



日本の経験を話すミャッタナートン

文コンクールに実践についての報告や自分自身が教師として自問自答しながらこれから教育者の道について模索しているという総括的な話がありました。

最後に準備や会のスムーズな運営に裏方として協力して頂いた村の委員会の皆様に心より感謝の意を表したいと思います。



イエーピューの U Myint Soe



参加した ARTIC スタッフの写真
ミャンマー便り第 130 号「カレン族のお正月に招かれて」

1月 15 日

去る 1 月 9 日から 10 日はカレン族の年越しのお祭りで、私の家族と ARTIC スタッフ 4 名は、
ジージャウン T8 ナヌインガヤイ村の正月に招待されました。夕方村に到着するとお茶頂きながら村人と懇親し、カレン族の歴史や年越しのお祭りの意味などについて色々と話を伺いました。

夕食をご馳走になった後遅くも暗くなり、ステージのあるお祭りの広場に村人たちが集まり、何発もの花火を打ち上げて新年を迎えるお祭りが始まりました。近隣近在の村の若者の代表たちが民族の唄や踊り楽器等を披露してくれ、お祭りはどんどん盛り上がって行きました。私たちが見た 8 つの踊りの中で、最後のものはカレンの言葉や文化、民族が何時までも滅びないようにという願いを込めて踊らせて貰ったことを聞いて非常に感動深いものがありました。彼らは国を持たずタイ、ラオス、カンボジアなどにも住んでいますが、カレン民族はチベットに端を発し今年 2016 年はカレン暦で 2755 年ということです。この解は彼らがミャンマーの地に来た時から始まるそうですが、日本の皇紀(神武天皇即位紀元 2676 年)より 79 年も長いことに驚きました。

翌朝は 6 時前より皆が集まり明るくなっていく空に向かって一同が厳粛に民族旗掲揚を行い、その後長老たちが若者たちにカレン民族の歴史や文化伝統、民族旗の意味などについて講話をを行い新年を迎える式が終わりました。

